

部落差別問題と真宗学

谷 眞 理

はじめに

親鸞の「御同朋御同行」の精神に生きんとするわが身・わが教団が、「普くもろもろの衆生と共に、安楽国に往生せん」（『願生偈』）との願いを見失い、「御同朋御同行」の精神に違背してきた、その事実に覚醒したのは部落差別問題を契機とする縁に遇ったからである。気づかなかったことには、気づかぬことが持つ差別性がある。気づかないことの差別性の要因と背景をわが身において、真宗教団において自ら検証することが求められた、それが真宗教団における部落差別問題である。

したがって、真宗（教団）にとつての部落差別問題は、数ある社会問題の中からその一つとして選択するという質の問題ではない。真宗教団の非法・違法の歴史的事実とその要因・背景を検証することは、真宗における教学・教化の内容・質と別のものではない。部落差別問題についての学習とは、「学習」といつつも「学問」すなわち「問いを学ぶ」ということであると思う。定められた答えを学習するのではなく、また定められた言葉に行き着くことでもない。「問いを学び、問いに学ぶ」ということが部落差別問題学習と真宗学の一致した学の方であると信知している。

部落差別問題から問われている問いを学び、問いに学ぶことは、真宗学の内容と質に影響を与えるものであるという私見を述べて、ご批判とご教導を仰ぎたい。

一 部落差別問題学習について

部落差別問題学習の根源にあるものは、「いのちとは何か」「人間とは何か」という問いであると思う。その「いのち」「人間」への視座・視点そのものは、人倫道德・人間中心主義によるものではなく、真宗の教えに樹つものであることを常に確かめていたい。視座・視点によって、「差別」とは何かという定義が、また学習の主体と目的が変わるのではないだろうか。

一九七七年四月十五日に開かれた真宗大谷派の同朋会運動十五周年記念の同朋大会において、教学研究所が立てたテーマが「個の尊厳と存在の平等」であったことを、後に宗派の機関誌である『真宗』^①をとおして知った。私はこの「個の尊厳と存在の平等」という言葉が、「差別」を考えるとときに的確な肝要な言葉であると受け止め、使用させていただいている。「個の尊厳」とは釈尊の誕生の意義が「天上天下唯我独尊」と言語化され、『仏説無量寿経』に「吾当於世為無上尊」（真聖全 第一卷・二頁「聖典」二頁）と説かれているように、「唯一無二の比べようのないかけがえないいのちをすべてのいのちと共に生かされて生きる一人の尊厳」という意味に受け止めている。したがって、「個」の尊厳は、「自我」の尊厳ではない。そして、「存在の平等」の平等とは、「等分」を意味するのではなく、異なる存在でありつつ、差異を認め合うことと云えるのではないであろうか。本来、人間の性、年齢、出生、職業、職種、地域、住民、言語、教育、宗教、思想、人種、民族等の差異は、「個の尊厳と存在の平等」なるものとして、認め合うべきものである。迫害、虐待、侮蔑、蔑視、排除等は、差異を認めないことから、「個の尊厳と存在の平等」を認めないことから生ずる。差別とは個の尊厳と存在の平等を認めず、本来平等であるべきものを不平等に取り扱う

ことだといえないであろうか。「平等」とは、決して強者の論理でつくりだすものではない。また、すべての差別をなくすことにおいて実現することを平等だと考えるのではない。

私は「個の尊厳と存在の平等」ということを考えるときに、「遇法」と「慙愧」、そして「願われて生きている存在」ということを離れて考えてはならないと思っている。差別や戦争、社会的犯罪など現前の事実を肯定できないものがあるからであり、「個の尊厳と存在の平等」ということを自己の正当化や、他者への批判に利用することがあってはならないからである。そのうえで、「差別とは個の尊厳と存在の平等を認め合わないこと」「差別とは個の尊厳と存在の平等の侵害である」と表現したい。

私が部落差別問題の学習を、私にとつての真宗学であると受け止めるようになった淵源は、大谷大学の大学院に在籍している時の稀有な境遇の体験にある。それはまさしく「個の尊厳と存在の平等」に関わることであり、「個の尊厳と存在の平等」を見失った共同体が、その弊害を露見することへの遭遇であった。その体験をとおして感じた憂いと悲しみが、部落差別問題の学習の場に身を置いたときに、それは個人的な感傷ではなく、部落差別問題にまつわる真宗教団の非違性と深く呼応する問題であることを知った。それまでの私は、部落差別は自分には関係ないこと、社会的・政治的問題として関わりのある人が問題にしていることであると考えていた。実際は、部落差別がどのような差別で、何が問題なのかもまったく知らなかった。だから、真宗学とつながることなどは考えていなかったし、自己と関わりが無いとする人を排除するわが身を悲しむ慙愧の念もまったく持たなかった。真宗の僧侶として経典を読誦し、真宗学徒としてその経言を学びながらも、この身の事実としては、被差別者や社会的弱者を無視し、排除しながら、「十方衆生」「諸有衆生」と呼びかけられる仏願の生起本末を聞こうとしているのである。それはまったく自己矛盾であり、自ら宗教的生命を喪失しているわけである。そのことに気づかされた、それが私にとつての『同和』問題」即ち部落差別問題であった。

私は部落差別問題の学習を機縁として「虚仮不実のわが身」（『正像末和讃』愚禿悲歎述懐「聖典」五〇八頁）の事実を知らされた。部落差別問題から照射されて「虚仮不実のわが身」の事実を知見し、そのことによつて「無慚無愧のこの身」（同「聖典」五〇九頁）に遇法の縁をたまわっている事実のかたじけなさをも信知させていただいた。

二 「糾弾」と自己究明

真宗教団は、自覚的に「差別」に向き合うようになったのではない。差別事件を契機とした「糾弾」をとおして、自らの差別的体質に覚醒する縁を得たのである。それ故に、「やらされている」という思いを固執しつづけている人がある。しかし、「糾弾」を縁として気づかされたことは事実であるが、気づかされたことを縁とした後の歩みは、自主的な主体的な求道であるべきである。「やらされている」という思いに固執し、問われている「問い」を避けようとすることは、他者の足を踏みつけていたことに気づかされて、一端は足を踏みつけていたことを詫びるようなふりをして、踏みつけている足はそのままにしているようなものである。

私が部落差別問題を社会的問題・政治的問題の一つとするのではなく、真宗の僧侶としての存在、真宗学を志す存在のすべてを根源的に問うものであると受け止めることになった機縁は、ある言葉との出会いである。それは一九六七年に惹起した真宗大谷派「難波別院輪番差別事件」の第六回糾弾会（一九七一年六月）における米田富の指弾の言葉である。米田は、全国水平社創立メンバーの一人で、部落解放同盟奈良県連合会初代委員長であった人である。米田は糾弾会において、「あの先刻からね、皆さん方のお話を聞いておりますとね、私ども親鸞を信じておる者としてましては、全くここへ来ても力ぬけるわけです。さつきから皆さん方ね、第一番、議会の方々もそれから本山の方々もあわせて、私お聞きしたいと思うんですけどね、先程から何やら差別したことが悪い、申しわけないとか何とかこう、我々に謝るように言うておられますけどね、私は皆さん方、本願寺の僧侶としてね、そういうことはご開山に申しわ

けなかったというような気持ちはないんですか。あなた方ね、ご開山の教えを正しく伝えて、そうして衆生を指導していられる任務にあるお方だと思っておるんです。そういうようなことを看過したり、無意識のうちとはいいながら、あなた方の日常生活そのものが差別を温存し、これを将来に持続させるような働きをしているんです。(以下略^④)と、真宗門徒が自らの本山で教団の非法・違法性を糾す悲しみを内に秘めて、声を振り絞って問いかけた。この声は録音されており、真宗大谷派の教師修練に大切に使われてきた。これまで多くの修練生に覚醒を促した貴重な「声」である。

この米田の言葉の中の「無意識のうちとはいいながらもですね、あなた方の日常生活そのものが差別を温存し、これを将来に持続させるような働きをしているんです。」という言葉が、私には長い間気がかりであった。漠然と言ったことではないと思う。真宗門徒として、真宗教団の、真宗寺院の現実をよく知っていたのだと思う。だとすれば、私たちの日常生活の何をどのように見ていたのか、それがずっと気になっていた。それを問いとして私は聞法し、自己究明に努めてきた。

三 同朋と同胞

わが教団、わが寺、わが身について自己究明していくなかで、最も重大な問題は「同朋」と「同胞」の違いではないかと考えるに至った。

真宗は親鸞の「御同朋御同行」の精神を立脚地とする。『浄土論註』に

同一に念仏して別の道なきがゆえに。遠く通ずるに、それ四海の内みな兄弟とするなり。眷属無量なり。

とあるように、釈迦・諸仏の弟子となることにおいて阿弥陀如来の弟子、仏弟子となる、それは帰依処を同じくする

(『真聖全』第一卷・三三五頁「聖典」二八二頁)

一列平等の関係である。ところが人間は、夫婦、親子、家族、村落、県、国、民族等々小さな共同体や大きな共同体を形成しつづけて生きている存在である。殊に血のつながりによる共同体意識、仲間意識は非常に強いものがある。血のつながり、仲間意識、はらからを意味する言葉として「同胞」がある。「胞」は「胞衣」と書いて「えな」、つまり胎児を包んでいる膜および胎盤・へその緒などの総称を意味するが、「同胞」はその元は親を同じくするという意味を持つ。親を同じくする、つまり血のつながりによる仲間意識を意味する言葉であり、それゆえに大切にされてきた言葉である。ただ、血のつながりによる仲間意識は、自分の属する共同体が他の共同体よりも常に優位であり、上位にあることを欲求する。そのことの善し悪しを論じるつもりはないが、「同胞」という共同体の意識にそのような上方志向、上昇志向の性格が強いことに注意しなければならない。

性、年齢、出生、職業、職種、地域、住民、言語、教育、宗教、思想、人種、民族等々は、人間の固有の尊厳・存在の平等なるものであり、差異を認め合うべきものである。しかし、人間は認めることよりも、むしろ違いをさがして、分別しようとしがちである。そこに血のつながりが閉鎖的な仲間意識となれば、自分の属する共同体が他の共同体よりも常に優位であり、上位にあることを欲求する性格が歪み、激しくなったときに、他者の存在を認めようとせず、他者への蔑視、憎悪、排除、迫害、虐待等によって、所属することを排除しようとする。また、優越感に浸ろうとしたり、あるいは自らの抑圧を解除しようとする。

「日本民族」という血のつながりによる「同胞」意識が、歪曲して、その「優索性」を誇示する意識に陥れば、在日韓国・朝鮮人差別、アイヌ民族差別、外国人労働者差別などに深くつながることになる。

「御同朋御同行」と言いつつ、実は日常生活は「同胞」意識になっていたことの証が真宗教団の非違の歴史に見られる。真宗教団は被差別部落の寺院をピラミッド型封建的身分階層の最底辺ではなく、ピラミッド型の枠の「外」に位置づけた。それは徳川幕藩体制に並行したものと考えられる。徳川幕藩体制における被差別部落は、徳川幕府によ

って作られたのではなく、中世社会における被差別民衆の位置づけにさかのぼることが明らかになっている。真宗教団のピラミッド型化も蓮如亡き後に具現化が著しいものになった。中世社会における被差別民衆の位置づけを教団に写し取ったものと考えられる。したがって真宗教団の非違の歴史、その要因と背景は、部落差別の起源とその歴史に大きな影響、積極的・主体的影響を受けていると考えられる。そして、閉鎖的な共同体意識、「同胞」意識は、真宗教団における「門跡（法主）」を頂点としたタテ社会の形成と受容につながったと考えられる。また、中世における「殺生禁断思想」、「触穢思想」と部落差別は深く関わることであるが、真宗にも関わることである。さらに、共同体信仰を支える触穢思想、先祖祀り、家制度、そして差別を肯定したり、あきらめさせたり、覚醒を阻害することに機能した非真宗化・反真宗化した教学・教化の問題等々が差別意識の持続に関わることだと思う。

これらのことが米田には見えていたのではないであろうか。私は自己究明することとおして、気づかないことは気づかぬことが持つ差別性があるのだと認識した。

四 人間と差別

「差別は悪いこと、差別はしてはならない」ということは、もう十分にわかっている。自分は差別をしない、それではないではないか。」という思いを持っている人は、今なお少なくはない。「わかっている」「もういい」と言いつつ、自らの差別問題の学習の不十分さを自認し、一方で「差別はなくならない」と断定する。学習が不十分であると言いつつ、短絡的に性急に結論づけて、考えることを放棄するのは、なぜであろうか。そこには、さまざまな問題が内在している。

私たちは気づかぬうちに差別を支えている。気づかぬうちに差別を支え、持続させてきた論理そのものを究明し、明らかにして、否定しなければ、根強く潜在してきた偏見を克服し、差別とたたかう主体を確立することは困難であ

る。人間は関係存在であるが、

わがみをたのみ、わがころをたのみ、わがちからを上げみ、わがさまさまの善根をたのみ

（『一念多念文意』・『聖典』五四一頁）

煩惱具足の存在である。食欲の自我意識が思うようにならないと、瞋恚の煩惱によって抑圧したり、排除しようとする。もしくは愚痴の煩惱によって、現実を現実として受け止めようとはせず、関係性を断って現実から逃避しようとする。煩惱具足の存在として、その煩惱により自他を分別し、自我に執着して自己と他者との間に人間の根源的連帯を分断する壁を造る。自他の間にある壁は、それはそれとして、壁を持つ一つの共同体となつて、その共同体としては別の共同体との間に壁をつくる、というように限りなく壁を造つて、家族・町村・国・民族等々大小の共同体に属して生きている。その壁を造ることそのまゝが差別なのではない。しかし、その壁によって日常生活の中で不利益を受けている人々は、常に壁を意識せざるを得ないが、壁を造り出している側にとつては、その壁はそれほど都合なものではなく、むしろそれをそのままにしておく方が都合だとさえ考えてしまう。そういう心が差別との関係を持つようになる。

私たちは、人として生まれて成長する過程で、家族や友人等の身近な人が持つ差別意識に取り巻かれる。また学校や職場などの生活する環境の中にある差別的な状況に影響を受ける。予断や偏見に染まれば、感情的には歪むし、感情的に歪んでいけば、誤った認識を改めようとはしない。そして人間の尊厳を欠落させた感性は、被差別者に対する歪んだ差異感を固執させる。自他を分断する壁は、無意識のうちにも絶えず造り出されるのである。人間が他を見下したり、蔑んだり、優越感や劣等感を抱くようになるのは煩惱具足の存在であるからである。煩惱具足の存在であるゆえに、他者に影響を受けるだけではなく、いつしか差別する壁を表出する立場、壁を造ることに影響を与える立場になる可能性を持っているのである。

私たちは、自己中心的意識が暗黙のうちに差別を認めてしまうことに気づかない。「確かに問題があることはわかるけれども、それは仕方がないことだ。」「今、直接に自分の生活権が奪われることにならなければ、それでいい。」「問題があるとしても、他と比べてみればまだ良い方だ。」「寝た子は起こさない方がいい。」等々の意見は、多くの場合、これまでに人権侵害、差別を受けることのなかった人々、またこれからも無いことを確信している人々から出てくる。心の持ちよう、ものの考え方の問題だと主張する人もある。はたして、私たちは自分の心の持ちようを自分の思うようにできる存在なのであろうか。自分の思うようになってほしいがゆえに自分がはからい、そのはからいでは自分の思うようにならず、それで苦しみながらも、その苦悩の原因を自己の外に求めているのが人間の姿ではないであろうか。さらには「みんながそううだ。」「みんながそう言っている。」「みんながやっている。」として、自己を正当化しようとする。また、自分の弱さを「抑圧の転移」によって解消しようとする。そのような「心の持ちよう」「ものの考え方」の問題だとする「心」こそが、自らの覚醒を自ら阻害し、人間のつながりを分断する一面を生み出す。抑圧され、差別されている人々の悲しみ、苦しみが自らの痛みとならない閉ざされた心こそが問題である。

私たちは差別を生み出す社会機構の中に生まれて生きて以上、無意識のうちにも差別を支えている一面がある。差別の論理そのものを否定しない限り、被差別者の側に同情的に身を寄せてみようとも、「さるべき業縁のもよおさば」すぐさま差別の論理にかわっていく可能性をもっている。

五 主体と目的

米田富が真宗大谷派の「難波別院輪番差別事件」を契機とする糾弾会において、当時の教団と教学、さらには教えを聞くこととする者の生活のありようまでを鋭く問いかけてから十三年を経た時、大谷派の或る研修会に米田を招き、話を聞くことができた。その時に、全国水平社創立当初から真宗教団へ切望してきたことは、「聞いてもわからない

ような難しいことは何も言ってもらわないでもいいから、何か一つでもいいから、親鸞のように生きていることを生活の中で身をもって実践してほしい」ということであつたと言われたことに、頭のあげようのないものを感じた。この時、部落差別問題を学習する主体と目的の曖昧さに気づいた。

当初私の中のどこかに、差別の問題は被差別者の問題であり、被差別者が被差別の状況から解放されることを目的とするものであるかのような思いがあつた。しかし、米田は「我々の為に何かをしてくれと言つたことはない。あなたがたは、今のままで親鸞の本当のとも同行であると言ひ切れるのですかと言つているのです。」と言つた。

部落差別問題の学習が教養化したり、一過的になることに深く関わる問題が、この学習の主体と目的の曖昧さではないであらうか。真宗（教団）における部落差別問題学習は、誰が、誰に、何のために、何をどうしようとするものなのか、何を願われ、願いとするものなのか、をよく確かめておかねばならない。「誰が」が決まることによつて、「誰に」「何のために、何をどうしようとするものなのか」が相応したものになる。また、「誰に」が決まることによつて、「誰が」「何のために、何をどうしようとするものなのか」が相応したものになる。この問いへの応答が、場合によつては、予断と偏見の所在を明らかにするであらう。「被差別者」の存在があるから差別があるのではない。差別をする者、気づかないままに差別を支えている者がいるから差別があるのである。「被差別」とは、差別者側が概念化したものである。

真宗の教えに学ぶ者としての学びの主体と目的を考えると、私は『浄土論』の

世尊我一心 歸命尽十方 無碍光如来 願生安樂国

〔真聖全〕第一卷・二六九頁〔聖典〕一三五頁

という偈に如実に表明されているのではないかと考える。その「我」は、

普共諸衆生 往生安樂国

〔真聖全〕第一卷・二七〇頁〔聖典〕一三八頁

と願う我である。『尊号真像銘文』に

「世尊我一心」というのは、世尊は釈迦如来なり。我ともうすは、世親菩薩のわがみとのたまえるなり。一心というは、教主世尊の御ことのりをふたごころなくうたがいなしとなり。すなわちこれまことの信心なり。「帰命尽十方無碍光如来」ともうすは、帰命は南無なり。また帰命ともうすは、如来の勅命にしたがうこころなり。尽十方無碍光如来ともうすは、すなわち阿弥陀如来なり。この如来は光明なり。尽十方というは、尽はつくすということごとくという。十方世界をつくして、ことごとくみちたまえるなり。無碍というは、さわることなしとなり。さわることなしともうすは、衆生の煩惱惡業にさえられざるなり。光如来ともうすは、阿弥陀仏なり。この如来はすなわち不可思議光仏ともうす。この如来は智慧のかたちなり。十方微塵刹土にみちたまえるなりとするべしとなり。「願生安樂國」というのは、世親菩薩かの無碍光仏を称念し、信じて安樂國にうまれんとねがいたまえるなり。

（『聖典』五、八頁）

と教説されている。ここに「誰に」「誰が」「何のために」「何をどうしようとするのか」が明確に示されている。この教説に導かれて、私の部落差別問題学習の主体と目的を述べるならば、「誰に」は、如来にであり、糾弾を縁として気づかぬことの差別性に覚醒せしめてくださった人々に、である。「誰が」というなら、もちろんこの私がであるが、「普くもろもろの衆生と共に、安樂國に往生せん」と願う私、縁の不思議に生かされて生きている私が、である。「何のために」というなら、「普くもろもろの衆生と共に、安樂國に往生せん」がためであるが、わが身の邪見憍慢、虚仮不実さに気づかず喪失している人間性を回復するために、である。差別者にとつての差別とは、差別することによって自らが人間性を失うということの問題である。であるから何のために部落差別問題の学習をするのかといえ、気づかぬままに差別を支えて人間性を喪失している者が、人間性を回復するために、である。「何をどうしようとするのか」というなら、「尽十方無碍光如来に帰命して、安樂國に生まれんと願ず」ということであるが、同朋精神と歎異の心を立脚地として、ただひたすら聞法し、そして邪見憍慢、虚仮不実のわが身への慙愧の縁をたまわり、「個

の尊厳と存在の平等」に生きる姿勢を回復し、親鸞聖人の教えに生きる者となることを願求する、そのために問いを学び、問いに学び続けようとするのである。

六 課 題

「人間が煩惱具足の存在であるかぎり、人間から差別意識はなくなならない、人間の意識としての差別心がなくなないゆえに部落差別はなくなならない」と考える人が少なくはない。しかし、部落差別が人間の政治的意図・目的から作り出され、存続されてきたものである以上、部落差別は人間の責任・人間の努力によって克服できるはずである。そのためには多大な時間とエネルギーを要すると思われるが、人間が人間であるためにも、部落差別の克服に向かつて努力すべきである。私たちは、人間の差別心の問題と部落差別問題との質と内容をそれぞれに丁寧に、慎重に、認識・把握すべきである。その二つの問題の差異と深まりあいを照らし出すものが、真摯な聞法、求道であることを信じている。

真宗学を専攻する者にとつての課題という意味で、私が関心を持ってきたのは、『中道』誌差別事件^⑤における曾我量深の自己批判とそれをもとに表明された「真宗学同和問題研究協議会の見解」^⑥の意味・内容である。さらには、それに対する宗門人の反応である。

一九七〇年に、新潟県の三条別院において「宿縁と宿善」と題して行なわれた曾我量深の講話が、宗教誌『中道』第96号に掲載された。文中に「いくら真宗二百二十万の人がいくら大きい声を出して南無阿弥陀仏を称えたからというて、それは特殊部落みたいなもの、何も自慢にならぬ。そう思います。」という差別表現があった。この事件は真宗大谷派における「難波別院輪番差別事件」を契機とする第5回糾弾会の後に生じた。前年に「開申事件」が起きて、教団問題で宗政が混乱している中で生じた。この事件の取り組みには、宗政の与野党の逆転や、大谷派における部落

差別問題への取り組みの先達者である武内了温^⑦の流れを汲む人々が排除されるという混乱があった。この一連の不純な経緯が多くの宗門人に「同和」問題とその取り組みに対する新たな予断と偏見を与え、以後も悪しき影響を残した。「同和」問題に取り組むといっても、主体と目的の違いによって、取り組みの内容も方向性も大きく違ってくる。そのことの十分な認識のないまま、「同和」問題に関わる人間は皆同じだとして、関係を拒絶し、排除しようとする、それは明らかに予断と偏見である。その予断と偏見が驚くほどに教団全体に浸透していた具体的事実を、私は当時「真宗大谷派同和推進本部」の本部委員に在職していて、大谷派に相次いで惹起した差別事件に取り組む中でまざまざと知らされた。

曾我の自己批判「異るを歎く」は、念仏者の生活の原点をあらためて学ぶことのできる意味深い内容である。また、「真宗学同和問題研究協議会の見解」は、それまでの「真宗人」「真宗研究に携わる者」の慙愧と総括が表明されたものである。これは単に「中道」誌差別事件」の対応のために表明されたものではない。教団の制度、機構、教学、教化の総括と課題を明らかにしたものである。この「見解」は真宗大谷派の『部落問題学習資料集』に掲載されているが、あまり読まれていないようである。これは「私見」であるが、先に述べたとおり、部落差別問題についての正しい認識と武内了温の精神が教団全体に周知・理解されない状況にあるとき、多くの人々にはその事実も取り組み姿勢の違いも見えなかったがために、偏見が助長されたのだと思われる。また、曾我への過大な尊敬感情から曾我の自己批判を矮小化し、遠ざけて、予断と偏見を正当化し、抑圧を転移させることに陥ってしまったのではないであろうか。曾我の自己批判の真意を受け止め得ず、教団の課題として共有できなかったのである。曾我の自己批判を読むことがあっても、読んだ人の「わが表明」とならなかったのである。

大谷派において「中道」誌差別事件以前と以後とは、問われていることに差異がある。真宗教団の長い歴史の中で、非真宗化・反真宗化した事実が伝承されてきたが、先ず、そのことに気づかないのは、気づかぬことの差別性

があるのだということに気づかされた。そこで、それは封建遺制の残渣によるものだから、教団の近代化の推進により解決するという考えになった。近代化の推進すなわち「同朋会運動」の推進であったのである、しかし、その近代化の推進の中で相次いで差別事件が惹起した。

曾我は「機の深信の欠落」であると懺悔した。つまり「普共諸衆生 往生安樂国」との願いに生きる「我」であることが欠落していたと懺悔したのである。本来ならば、曾我のこの懺悔が教団の大切な分岐点であるべきだったと思う。しかし、先に述べたような新たな「同胞化」、予断と偏見が生まれ、同朋会運動推進の指導者的立場の人々による差別事件が相次いで生じたのである。

部落差別問題の学習と聞法の不一致が蔓延し、部落差別問題学習の主体と目的が曖昧になっていたのだと思われる。それは同朋会運動の主体と目的を問うものでもあったのであるが、そのように呼応しあう課題であるとは宗門全体に周知されなかった。このことには、私自身、大谷派の「同和推進本部」の本部委員として深く関わってきた身としての責任を痛感している。それゆえに歩みを止めることなく、これまで述べた視点から、曾我量深の表白「異なるを歎く」とそれをもとに表明された「真宗学同和問題研究協議会の見解」を今現在への指教として受け止め、「問い」を学び、「問い」に学んでいきたいと思う。

おわりに

一九二二年に被差別民衆が自主的、自立的な部落解放運動の全国的組織として全国水平社を創立した当時、「部落民」の約八割を東西両本願寺は門信徒としていたといわれている。つまり、真宗門徒が同じ真宗門徒でありながら、「差別・被差別」の関係にあったのである。この非真宗・反真宗の現実気づこうとしないで、むしろ無視し、抑圧・排除し、差別を支えてきた教団、寺、わが身の実態があったのである。それは自ら宗教的生命を喪失させている

ことであると覚醒せしめた問題、それが真宗教団における部落差別問題である。

被差別部落の真宗門徒の本尊は南無阿弥陀仏であり、また差別を支えてきた真宗門徒の本尊も南無阿弥陀仏である。なぜ南無阿弥陀仏の本尊のもとで真宗門徒が「差別」「被差別」に分かれたのか、その過ちを課題として、差別・被差別を超克する原理は念仏にあるという証を親鸞はどのように明証しているのかを開いていく、それが私にとっての真宗学の質と内容であると考えている。

注

① 『真宗』（第八七八号）一九七七年五月号

② 一九六七年に真宗大谷派の大阪の難波別院の輪番が引き起こした事件。輪番が別院の男性職員と女性職員が交際していることを阻害しようとして、その女性職員に相手の男性は被差別部落出身であることを告げ、さらには男性職員に退職を勧告し、給与中の技術手当をダウンさせた。部落解放同盟からの抗議に対応し得ぬ大谷派に対して、一九六九年から一九七一年にかけて八回にわたって糾弾会がもたれた。大谷派は当初輪番個人の問題であり、懲戒に付し、退職せしめることで処置しようとしたが、問題の本質に対する認識が不十分であるという指摘を受けて、輪番個人のみの問題ではなく、教団自体に深く根ざしている教団の本質的な問題であり、教団自体が差別教団であったのであるという点が明確に知らされたと自己批判し、ようやく部落差別問題に取り組み教団の姿勢を表明したのである。

詳細は真宗大谷派『部落問題学習資料集（改訂版）』を参照。

③ 米田 富。一九〇一～一九八八。西光万吉と共に全国水平社を創立した一人。奈良県現五條市に生まれ、大正・昭和期の部落解放運動に生涯を捧げた真宗門徒である。部落解放同盟奈良県連合会初代委員長。

④ 真宗大谷派『部落問題学習資料集（改訂版）』七六頁。「資料一六 米田富の怒り」

⑤ 真宗大谷派『部落問題学習資料集（改訂版）』九四～九六頁。「資料一九 曾我量深の表白」

⑥ 真宗大谷派『部落問題学習資料集（改訂版）』一〇〇～一〇三頁。「資料二一 真宗学同和问题研究協議会の見解」

- ⑦ 武内了温。一八九一～一九六八。真宗大谷派における浄土真宗の教法に立った部落差別問題への取り組みの創始者。兵庫県竜野市の大谷派松林寺に生まれる。京都帝国大学を卒業して、滋賀県社会改良事務嘱託に在職中、招聘をうけて大谷派の宗務所に入り、社会課を創設。部落問題への宗派内の無理解の中を部落解放運動に完全燃焼した生涯であった。詳細は真宗大谷派『部落問題学習資料集（改訂版）』を参照。